インド統計協会の25周年記念式典に列席して

美濃部亮吉

(一)

私は12月11日の夜インドのカルカツタに向つて羽田を発つた。インド統計協会に招待されて、その25周年記念式典に列席するためである。翌日の午後4時ごろカルカツタに着き、インド統計協会のゲスト・ハウス(お客様のための宿舎)に案内された。インド統計協会は、カルカツタの町はずれから、4キロほど離れた郊外にある。カルカツタの銀座チョーリンギ街からだと8キロ近いだろう。バスで行くとたつぷり1時間はかかる。

1951年に行つた時には、インド統計協会の建物は建築中でまだ完成していなかつた。今度行つた時もまだ増築中ではあつたが、主要な部分ほはほ完成していた。敷地はずい分広い。1万坪を超えるのではないかと思われる。インドの郊外には、方々に池がある。恐らく水道が完備していないためであろうか。こういう池は、人工で作つたもので、ここで洗濯もすれば、水浴びもするし、驚くべきことは食器ここでも洗う。インド統計協会の構内にもこういう池が三つもある。ずい分大きい池で、横が20メートル、たてが50メートルほどもあるように思われた。この三つの池のふちに、三つの建物がたつている。

一番南のふちには、インド統計協会の副会長であるマハラノビス教授の邸宅がある。なかなか立派な建物である。マハラノビス教授の私宅というもののインド統計協会の庶務をとる室もこの中にあるし、お客様をとめる部屋もたくさんある。南の方から数えて2番目の池のふちには、インド統計協会の建物がある。5階だての細長い建物で、50メートルほどの長さである。この建物の向つて右半分がゲストハウスになつており、左半分が教室や図書館になつている。第三の池のほとりには、バラック建の平屋がある。これは、地方や外国から来た講習生を泊める所らしく外観も内容も一番粗末である。お客様に行つてこんなことを言つては失礼に当るかも知れないが、三つの建物では部屋自体にも差異があるし、出される食事も大分ちがうように見受けられた。第1の一番立派な建物には、イギリスのフイツシヤー教授とかアメリカのセンサス局のハンセン氏とかスイスのリンダー教授とか九大の北川教授とかが泊つておられた。インド統計協会と一番関係の深い方々なのであろう。面白いことにはゲストハウス第1号に泊まられた方々は、御本人だけでなく、夫人乃至は令嬢も招待されたらしい。私は、ゲストハウス第2号に滞在した。

この第2号宿舎には、私のほかに、ソ連の代表者が7人、中共の代表者が4人、レバノンの代表者が1人、国際統計協会の人が1人、アメリカのエール大学のミラー教授及びカルホルニヤ大学のネイマン教授が泊つておられた。こういう人達が、同じテーブルをかこんで3度ずつ一所に食事をとるのだから、なかなか面白い。文字通り国際色ゆたかな食事風景だということができるだろう。ソ連及び中共の両社会主義国の代表者達もなかなか愛想がよく、あまりうまくない英語で愛きようをふりまいていた。私が滞在していた3週間ほどの間には一度も冷い戦争もまして熱い戦争も起らず終始平和共存の状態がつづけられた。

25周年記念式典には、凡そ16ケ国ほどから40人あまりの統計代表者が招待された。こういう人達の往復の旅費や滞在費はすべてインド統計協会が受け持つてくれる。それだけではなく、記念行事が終つた後で、向うの費用で国内をどこでも旅行させてくれる。こういう旅費滞在費を合計すれば大へんな額になるに相違ない。後できい

ところによると1億円以上の予算が見つもられているということであつた。そして、それは全部政府の予算でまかなわれているということである。政府の補助を受けているとはいえ、形式的には民間の統計団体の25周年記念に、1億円以上の予算がつくということは、日本では到底考えられないことである。マハラノビス教授がインド政府の経済顧問であり、ネール首相の信任も厚く、且つ彼の政治的手腕もなかなかのものであるというような色々の事情による所も大きいであろうが、統計団体の記念行事に1億円以上の予算をつけるということは、とにかくインドでは統計が日本とはくらべものにならないほど尊重されている証拠だと非常にうらやましへ感じられた。

日本では統計法施行10周年を祝うささやかな予算も、全額拒否されてしまつた。

（二）

もし日本で記念行事をするのに1億円もの予算がとれでたら、相当はでな晩さん会でも計画するに違いない。16カ国ほどの国から40人以上の統計家を招待するというのもはでな計画にはちがいない。しかし、行事そのものは大へんに質素な地味なものであつた。

この前に書いた第2の池に沿つて相当に広い空地がある。そこに演壇を設け、たくさんの蛍光灯をつるし、椅子をならべたのが色々の催し物をする場所なのである。12月から1月にかけてインドの空は毎日毎日一点の雲もなく晴れ渡り、雨などくすりにするほども降らないのだから、雨の時の用意などをする必要もなく、安心して野天で催物を計画することができる。冬とはいえひるまは80度を越える暑さなのだから、野天に坐つていると蚊軍が襲来するのにはいささか閉口した。

25周年の記念式典としては、この野天の式場で、2度会合が催されただけである。1度目はインド統計協会の会長デシユムク氏(前大蔵大臣)及び副会長マハラノビス教授を初めインド協会に関係のある十数人の人達がかわるがわる長広舌を振つておしまいになつた。2度目は、外国の代表者達が祝辞を述べるだけで終りになつた。この時私も日本の代表としてまづい英語で祝辞を述べた。両度とも会が終つて、そまつな紅茶と御菓子が供せられた。1億円の予算で行う記念行事としては、むしろあつけないという感じを抱かざるを得なかつた。

記念式典の行事とはいえないかも知れないが、12月18日から1月4日まで、外国から招待された人達及びインドの統計学者乃至経済学者の講議が、毎日午前と午後に分けて5、6人ずつ行われた。時間は1時間で、題目は講演する人が自由に選んだものらしい。数学者が多いだけに講議も統計数理に関するものが多かつた。たしか「オリエンタル・エコノミスト」の主筆だつたと思うが、インド統計協会を痛烈に批判した人もいた。後に述べるつもりであるが、インド統計協会は、第二次五カ年計画の草案を作つたのである。この第二次五カ年計画は社会主義の実現を目標としたもので、民間資本家の活動を抑制し、国家資本による企業活動をできるだけ活溌にしようという案であつた。

こういう行き方に対する財界の反撥は相当に激烈であるらしい。オリエンタル・エコノミストの主筆は、こういう社会主義化の方向を打ち出したインド統計協会を激しく批難したのである。彼の主旨は、インド統計協会は統計的基礎に基づいて計画が樹てられれば、それだけで経済は計画通りに進行するものと思つている。しかし、それは大まちがいで、いくら数字的にうまく計画が立てられていても、それを実現する力は、統計以外の所にある。民間企業を圧迫する計画は、こういう力を死滅せしめるものである。というような所にあつたようである。彼の主張に対しては、インド統計協会の人達や政府の中央企画庁の人達から猛烈な反対がなされた。ラオというニユデリー大学の教授は、第二次5ケ年計画は零細企業の発達をもつと重視すべきであり、又サービス業の発展に対する認識が足りないといつて第二次五カ年計画を批判した。私は、小企業及び国際統計教育に関するシンポジユームに参加して、日本の状態について報告した。

インド統計協会の25周年記念行事は、決してはなやかなものであつたはいえない。しかし、世界の有名な統計家達を招待し、互に語り合う機会を提供し、そういう先生方に講義をしてもらい、同時にインドの国内を広く旅行してインドを理解してもらうという企画は、たしかに有意義であつたといわなければなるまい。

（三）

最後になつてしまつたが、祝われる客体であるインド統計協会のことにふれておこう。インド統計協会の原名は Imdin Statistical Institute といわれ、カルカツタの郊外のバラツク・ポール街という所にある。インド統計協会に相当する組織は日本にもないしほかの国々にもない。

当然のことながら、1956年に25周年記念を祝つたのだから、インド統計協会は25年前の1931年に設立せられたことになる。しかし、正確にいうとこれは誤りで1931年の12月17日はマハラノビス教授等がインド統計協会の設立について会合をもつた日で、正式に設立されたのは翌年即ち1932年4月28日のことであつた。設立当初は、統計ことに統計数理の研究を目的とし、研究員も2、3名にすぎなかつた。同時にそれはマハラノビス教授等の統計学者によつて設立された純すいの民間団体であつたわけである。

インド統計協会に集つた学者達は、1933年にその研究の成果を発表する機関紙を発行するようになつた。それは普通サンキヤ（SonKya）と呼ばれており、数理に関する優秀な論文が掲載されるので世界的にも有名である。1935年には、インド政府から5000ルーピの補助金を支給されるようになつた。その後その補助金の額は段々と多くなり、それにつれてインド統計協会も半官半民の色彩を強くもつようになつた。1937年に、インド統計協会はインド中央ジユート協会と協同で、ジユートの生産高に関するサンプル調査を行つた。インド統計協会の統計的調査活動はその後段々と活潑になり、今日では立派な集計設備までもつている。その集計機械の半分はI・B・Mの機械であり、他の半分はソ連製である。1939年にインド統計協会は、統計家の養成のための教育機関を設けるようになつた。この面でも、インド統計協会の活動はその後ますます活潑になり、後に述べるように今日では色々の種類の教育コースをもつようになつた。

今日のインド統計協会も、以上に述べた3つの方面で主要な活動をしているようである。即ち、スタツフの人達の研究活動と、実際の統計調査活動と、統計家の養成のための統計教育の三つである。インド統計協会の活動がどんなに拡大されたかは、その金融の面を見るとよくわかる。設立当初の1932年における予算額は僅に1年250ルーピーにすぎなかつた。これが今日では約600万ルーピーに増大している。600万ルーピーとえいば、約4億5400万円に当る。いかにその規模が大きいかがわかるだろう。常勤の従業者も167人に上つている。

インド統計協会は、今日においてもなお形式的には民間の団体である。しかし、その仕事の大部分は、政府の依託を受けて、政府の金融的補助の下に行われている。5年度の予算を見ても、600万ルーピーの収入のうち523万ルーピーは政府の補助金である。その割合は87%に達している。こういう点から見ばインド統計協会は半官半民の組織、或いは政府の外かく団体だといつても誤りではあるまい。最近、政府の補助金を急増する法律案が提出されるということであつた。そうなれば、インド統計協会はますます政府の機関たる色彩を濃厚にするわけである。

現在インド統計協会では、統計教育に関するつぎのようなコースを実施している。

1. 高度の統計教育を施すための個ベースのコース
2. 統計専門家を養成するための3年間のコース
3. 統計教育のための短期コース
4. 国際統計協会と協同で実施されている国際統計教育コース
5. 職業をもつている人達に対する統計的再教育のためのコース

インド統計協会の行つているサンプル調査のなかでは、1950年から実施しているナシヨナル・サンプル調査（ThonationalSanpleSurvey）が有名である。これはマハラノビス教授の企画によるもので、或る一つの目的のた

茨城県調査統計連絡協議会の総会開かる

県内において調査統計事業を実施している官公庁および会社、団体をもつて構成される茨城県調査統計連絡協議会では、去る1月17日県議会第五委員会において昭和31年度定期総会を開催したが、協議事項と出席者名は次のとおりである。なお会議終了後出席者全員が県立体育館で開かれている原子力平和利用茨城博覧会を参観した

◇**協議事項**

1. 昭和30年度の決算について
2. 昭和31年度の予算について
3. 協議会の運営について
4. 資料の配付および情報交換について
5. そ の 他

★茨城県調査統計連絡協議会出席者芳名★

（所　属　名）	（氏　名）
東京電力茨城支店	佐藤和夫
〃	中崎祐吉
関東財務局水戸財務部	川又　弘
水戸地方裁判所	高崎倩子
水戸鉄道管理局	島田　操
電〃公社茨城電気通信部	久保田千代吉
日立鉱業所	佐藤　彰
県警察本部刑事部防犯課	長須敬信
日本銀行水戸事務所	桜井福寿
水戸測候所業務課	宇津木直治
日本専売公社水戸地方局	伊藤昇寿
水戸郵便局	中川信男
常磐相互銀行水戸支店	佐藤　栄
水戸商工会議所	井上国四郎
関東銀行	広木治彦
常陽銀行	大津清造
茨城労働基準局	加藤　勇
茨城県調査企画課	平野逸郎
〃	山中平守
〃	岡野　満

（順序不同）

【資料】　主　要　経　済　指　標　（日本銀行発行経済統計月報昭和31年12月号より抜すい）

	卸売物価	東京小売物価	消費者物価(東京)	輸出物価	輸入物価	名目賃金	実質賃金	消費水準 都市	消費水準 農村
昭和26年	…	…	…	…	..	100.0	100.0	100.0	100.0
〃 27年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	117.7	112.1	115.4	118.8
〃 28年	100.4	103.5	107.5	94.8	90.2	133.5	119.3	131.5	116.9
〃 29年	99.7	106.9	113.3	91.2	86.6	142.1	119.3	131.6	117.5
〃 30年	97.9	102.4	111.7	91.5	87.2	149.2	126.7	138.1	120.0
〃 31年	102.2	102.1	11月 113.0	11月 97.0	11月 86.1	10月 145.9	10月 122.2	9月 139.0	9月 106.7

めに調査客体を抽出せず、抽出した客体について色の種類の調査を行うものである。即ち生産・家計・失業・人口動態・交通等に関する調査をあらかじめ抽出されている同一の客体について行うのである。いうまでもなく、そのためには常任の調査員が使われる。インドのように地域が広く、文盲者が多く、言語が種々様々であるような国ではこういう多目的の抽出調査以外には調査の方法がないのではないかと思われる。

インド統計協会は、最近では政府の経済計画の立案をも引き受けるようになつた。インドの第二次5カ年計画の草案は、インド統計協会、中央企画庁及び経済省の協同作業によつて作成されたものである。

× × ×

インド統計協会の活動はまことにめざましい。全統連も、インド統計協会ほどではなくても、せめて完備した統計協会をもち、外国の統計家を呼んで、統計に関する講議をしてもらう位のことはしたいものだと思う。

（筆者は行政管理庁基準部長）